

やまなし文学賞青少年部門佳作

音を紡ぐ

丹沢みき 作

「今日からここが真白ましろの部屋なんだね」

「そうだよ。私用のベッドと机は明日届くみたい」

「机とベッドをおじいちゃんとおばあちゃんに買ってもらえてよかったね」

「うん。これでキラキラの小学生になれそうだよ」

「真白は保育園の友達と離れちゃったけれど、寂しくないの？」

「寂しいけれど、私には美緒みおがいるから平気だよ」

「美緒は寂しい？」

「寂しいよ」

「そっか。なら、元気が出るようにピアノを弾くね」

少女は小さな手をピアノに置き、奏で始める。

「美緒、元気になった？」

「うん。真白のピアノを聴いたら、元気が出てきたよ」

「本当？ よかった」

「これからもずっと真白のピアノを聴かせてね」

「もちろん。約束するよ」

春の温かい日差しの降り注ぐ部屋からは、高い声とピアノの音が聞こえる。会話をしているような雰囲気だが、声は一人分しかしない。そこにいるのは、小学校に入学する前の小さな女の子。そこにあるのは、小さな女の子が大切にしている人形。そして、ピアノだった。

「今日も疲れた」

私はそう言いながら、部屋のドアを開けた。そして、使たいだして十年近く経ったベッドにダイブする。制服がシワになるのはわかっているが、この習慣をやめることはできない。

「おかえりなさい」

そう言って私の顔を覗のぞき込んできたのは、『君』だった。彼女は私にしか見えない。いわゆる幽霊というやつなのだと思う。

「二限に小テストがあったんでしよう？どうだった？」

「いつもよりはできた気がする」

「よかったね。夜遅くまで頑張っていた成果だね」

幽霊と同じ空間にいると考えると怖いイメージを持つ人が多いだろう。しかし、『君』は全く怖くない。『君』がいつからこの部屋にいるのか覚えていない。忘れるくらい前から一緒にこの部屋で過ごしている。『君』がいて問題になることも今のところは何も無い。だから、私たちの関係性は学校の友達と変わらなかった。

「ごめんね。私が夜遅くまで勉強していたから、『君』はあまり寝れてないでしょ」

「全然平気だよ。それに、眠かったらお昼寝するから」

「今日のお昼は何をしていたの？」

「美緒とお喋りしゃべしていたよ」

「美緒は人形じゃん。どうやって話しているの？」

「それは内緒だよ」

私はこの幽霊を『君』と呼んでいる。呼びやすいように名前をつけようと提案したこともあったが却下された。小さい頃から大切にしている人形に美緒という名前をつけている分、よく話をしている幽霊の友達には名前がないのは違和感がある。長い時間を一緒に過ごしているのに、本当の名前も教えてくれない。理由を詳しくは聞いたことはないが、私にもし正体を知られたら、消えなくてはならないらしい。名前を教えないのは、そのリスクを減らすという目的もあるのかもしれない。

「私、高校の進路希望調査を渡されたんだ」

ベッドから起き上がると、リュックサックから紙を引っ張り出した。

「真白は将来何をしたいとか決まっているの？」

「……ピアノ」

私は『君』の問いかけに、小さな声で答える。そして、部屋に置いてあるピアノに目を向けた。ピアノの上に置いてある美緒と目が合ったような気がする。

「小さい頃から、ずっとピアノ弾くの好きだよね」

私は『君』の言葉に頷うなずいた。

「私ね、音楽科のある学校いいなって思っているんだ」

誰にもまだ言っていなかった自分の気持ちを口にした。

「私の好きな真白のピアノが沢山たくさんの人に届くの嬉しい」

『君』は笑顔で言った。

音楽科に行きたいとは中学一年生の時から思っていた。だけど、自分のピアノのレベルで音楽科に行きたいと言うのは笑われるかもと心配していた。だけど私は今、『君』の言葉に背中を押された気がした。

「お父さんとお母さんにも、しっかり真白の気持ちを伝えなきゃね」

『君』に言われて、私は頷く。

「真白の行きたい学校ってどこにあるの？」

「家からかなり離れた場所だよ。遠いから、この学校に通うことになったら、寮で暮らすことになるかも」

「そうなんだ。そのことも丁寧に説明しないとね」

「うん。『君』が隣にいて、お父さんとお母さんに言うなら心強いのに」

「私もそうしたいけど、私の姿は真白にしか見えないから」

自分の将来に関わることでだから、自分で考えて伝えなきゃいけないことはわかっている。私のお父さんとお母さんはかなり優しい部類に入ると思う。しかし、進路について真剣に話すのは緊張する。

「真白ならできるよ。応援している」

『君』はいつもの優しい笑顔でそう言った。だけど、その声はなんだか寂しそうだった。

夕食を食べる時、私は緊張していた。それを感じ取ったのか、お父さんとお母さんの動きも何だかぎこちない。

「音楽科のある学校に行きたいんだ。けどね、家から通えない距離なの」

私は切り出し、学校のパンフレットを机の上に出した。お父さんとお母さんはそのパンフレットを見始める。

「ピアノで？」

お母さんが私に問いかけ、私は頷く。

「小さい頃から練習頑張っていたもんね」

お母さんの言葉を聞いて、私は視線を上げた。

「毎年、お母さんとピアノ発表会に行くたびに、また上手うまくなったなって感じていたよ」
お父さんは私と目を合わせると、微笑ほほえみながら言う。

「お母さん、真白のピアノを聴くと元気がでてくるの。だから、真白の選択はすごいと思う」

「お父さんも賛成だよ。この学校だと真白と毎日一緒にいられなくて寂しいけれど応援している」

お父さんとお母さんは、私のピアノを今も喜んで聴いてくれることに嬉しくなる。さらに、応援してくれることもとても嬉しかった。

「私、まだ頑張らなきゃいけないこと多いけれど頑張るから。だから、これからも見てて」

私が言うと二人は笑顔で頷いた。私のピアノを好きと言ってくれる人がいる。私はそんな人たちにこれからも私のピアノの音を届け続けたいと思った。

「私、お父さんとお母さんに進学のこと伝えてきたよ」

私は背中を押してくれた『君』に、部屋に戻ると報告した。

「そっか。伝えるの頑張ったね」

「お父さんとお母さん、賛成してくれたよ。『君』が背中押してくれたおかげで、言うことができた。だから、ありがとう」

私は『君』に感謝を伝えた。そして、

「これからも、私のピアノを近くで聴いていてね」

と続ける。しかし、いつものように『君』は優しい笑顔をしなかった。悲しそうな顔で下を向いている。

「真白に言わなきゃいけないことがあるんだ」

胸騒ぎがする。私は耳に神経を集中させた。

「真白、私は美緒だよ。小さい頃からずっと一緒だった人形の美緒」

私は目を見開く。すぐには言葉が浮かばなかった。間が空いてから、私は言う。

「美緒は人形だよ。ピアノの上に今もいるじゃん」

「あれは私の人間でいう身体。見えている部分。そして、私は人間でいう心。見えない部分なの」

説明されても、なかなか理解することができない。それを見て、『君』はさらに説明を続ける。

「信じられないかもしれないけれど、私は真白のピアノを聴いて、感情を吹き込んでもらった。楽しいとか嬉しいとか、真白が私にくれたものなんだよ。それに、大切にされてきたものには、魂が宿る。私はその魂と感情を合わせて、今の姿を作りだした。人形は誰にでも姿は見える。だけど、真白が『君』って呼んでいた私の姿は見えない。人形のまま接するほどの力をもっていなかったから、姿と見えない部分を分離させたんだよ」

理解はしきれていない。だけど、『君』の正体が美緒だったということがわかった。

私は過去に『君』に言われたことを思い出した。

「どうしてそれを今言うの？ 私が正体を知ったら、消えるんでしょ」

私の問いかけに、

「正体を知られると消えるなんてことはないんだ。それは私が勝手に考えて言っていただけ」

と答えた。頭の中には疑問しか浮かんでいない。

「なら、どうして」

「私の消える条件は別にあるの」

周りの音なんてもう聞こえない。聞こえてくるのは、美緒の声だけだった。

「その条件って……？」

「……真白が初めて弾いたこのピアノから離れると、私の姿は見えなくなるの」

「どうして、ピアノなの？」

「私が生まれたきっかけだからだよ」

私がピアノを弾くとき、いつも美緒の人形は近くにいた。ピアノの上が美緒の定位置であることも思い出す。

「だったら、どうして私が音楽科の学校に行きたいって言った時にそのことを言わなかったの？ わかっていたら、家から通えない学校に行きたいなんて言わなかったのに」

「だからだよ」

私の言葉に美緒は被せるように言った。

「伝えたら、真白は私と過ごすために自分の気持ちに気づかないふりをすると聞いたの。今伝えたのは、美緒なりの優しさであったと気づいた。それでも私は、美緒がいなくなることを頭の中で整理することができていない。

「消えると言ってもいなくなるわけじゃないよ。本来見えないはずの私の姿が真白から見えなくなるだけ」

『見えなくなる』という言葉が頭の中をぐるぐるし始める。

「見えなくなるなんて、嫌だよ」

視界がぼんやりとし始めて、目頭が熱くなるのを感じる。

「見えないからっていなくなるわけではないよ。私は真白の近くにいます。これからも繋がっているから」

「そんな繋がりなんてない。見えなかったら、繋がっているなんて言えないよ」

美緒の言葉に反射的に言う。私のための決断だったとしても、私には美緒が必要だ。正体が人形だったとしても、私はまだ美緒と話したり、笑い合ったりしたかった。

「私のことを思っただけの決断だったとしても、私が反対するとは思わなかったの？」

「思ったよ。だけど私は、私のせいで真白が好きなきことをできないのはもつと嫌だよ」

美緒の声は悲しそうだった。そのくせ、無理やりいつもの笑顔を作って続ける。

「私からの最後のお願ひ。真白は自分の本当にしたいことをして」

痛かった。私を思っただけの決断が。昨日はそれ以上美緒と話をすることはできなかった。モヤモヤした気持ちで、私は登校することになった。進路希望調査の締め切りは明日に迫っている。自分がどうすればいいのか、わからなくなっていた。

放課後、美緒の顔を見るのが辛く、私は学校にいつもならない時間まで残っていた。

「この時間まで真白さんが残っているの珍しいね」

廊下で声をかけてくれたのは、音楽の先生だった。去年、合唱発表会でピアノの伴奏をしたことで話すようになった。

「何か悩みごと？」

私の表情がいつもと違うことに気づいたのか、先生は聞いてきた。

「進路について悩んでいて」

美緒のことは言えなかったため、私はそう伝えた。

「この時期だとそろそろ志望校決めなきゃいけないもんね。将来、やりたいこととかないの？」

「やりたいことはあるんですけど……」

「一度、やりたいことをしてみるのはどうかな。そして、自分の心に耳を傾けるの。そうすれば、答えを見つけるヒントになるはずだよ」

私の様子を見て、先生はアドバイスをくれた。

家のピアノは何だか気まずくて昨日から弾くことができていなかった。今の私にはピアノと自分の気持ちに向き合うことが必要であると気づいた。

「先生、音楽室のピアノを弾いてもいいですか」

「もちろん」

私の言ったことに対して先生は嫌な顔をしないで答えてくれた。そして、音楽室の鍵を渡してくれる。

音楽室のピアノは家のピアノとは弾き心地が違う。一人で音楽室にいることに何だか

違和感もあった。

私は鍵盤に手をのせる。指を動かすと音が響く。音が重なる。曲になる。楽しい、私は強く感じた。いつも練習も本番も思い出と共に奏でる。悲しい時は悲しい音、楽しい時は楽しい音。私は自分のピアノの音に耳を傾けながら、指を動かし続けた。

「すごく素敵」

弾いていた曲が終わると、先生はそう言いながら音楽室に入って来た。いつからドアの近くにいたのかわからなかった。

「真白さんは、本当にピアノが大好きなんだね」

私のそばまで来ると、先生は言った。

「どうしてそう感じたんですか？」

私は先生の言葉を不思議に思い質問する。

「ピアノには弾いている人の気持ちが聞こえるからだよ。真白さんのピアノには大好きっていう気持ちが込められている気がするの」

「気持ちが伝わる……？」

「うん。その人が今まで、どんな気持ちでピアノと向き合ってきたかも伝わるんだよ」
先生の言葉に胸が熱くなった。ピアノを弾けば、思いはきつと届く。そして、届け続けることができるんだ。私が音を紡いでいる限り。

学校から帰って来て部屋に入ると、ベッドにダイブする。そして、美緒と学校のことを話す。いつもならそうだが、今日は違っていた。私はリュックサックを置くと探し物を始めた。その様子を美緒は不思議そうに見ていた。

私は目的のものを見つけると取り出した。スケッチブックだ。少し埃を被^{ほこ}っていたため、手で払う。そのスケッチブックには絵が描かれているわけではない。私が過去に弾いたお気に入りの曲や発表会で弾いた曲の楽譜が貼られている。

私はピアノの椅子に座ると、そのスケッチブックを譜面台に置いた。数年ぶりに見た楽譜が多く、弾けるか不安だった。だけど、一小節弾くと一気に思い出したかのように指が動き出した。

「この曲、覚えている？」

私は黙ってピアノを聴いている美緒に声をかけた。

「覚えているよ。引越してすぐの時に弾いてくれた曲だよね」

「うん。懐かしいな」

「そうだね」

スケッチブックの一枚目は今でも楽譜を見ないで弾けるくらい大好きな曲だった。引越してから一年くらいは毎日弾いていた記憶がある。

「この曲は覚えている？」

「もちろん。ピアノ発表会でどうしても弾きたくて練習頑張った曲だよ」

ページをめくって、中学一年生の時の曲を出した。学校にまだ慣れなくて大変だったのに、難しい曲を選んで何度も後悔した。だけど、美緒が励ましてくれた。この曲を弾けたことは、当時の私に自信をくれたような気がする。

それから私は、何曲も何曲も奏でた。私が奏でている間、美緒はじつと聴いてくれている。

「忘れていると思っても、覚えていることって沢山あるんだね」

「そうだね」

「私、気づいたんだ。私たちはピアノで繋がっていたんだね」

「うん。だから、真白がピアノを続けている限り、この繋がりは切れないよ」

「私もそう信じている。だから、ごめんね。私はピアノを勉強してくるよ」

「ごめんじゃないよ。私の願いを叶えてくれてありがとう」

泣く私に美緒はいつもの優しい笑顔で言った。

「繋がっているよ、全部。これからの真白のピアノに」

「うん。だから、私これからも奏でるから。美緒の大好きな音を」

もう迷いはなかった。大丈夫。見えなくても私たちは繋がっている。だから私は前に進む。そして、私のピアノを届けていくんだ。美緒と私の繋がりを音にのせて。(了)